

去ぬる文永八年太歳辛未九月のころより御勸氣をかほりて、北国の海中佐渡の島にはなたれしかば、なにとなく相州鎌倉に住みしには、生国なれば安房国はこひしかりしかども、我が国ながらも、人の心もいかにとや、むつびにくゝありしかば、常には行きかよふ事もなくしてすぎしに、御勸氣の身となりて死罪となるべかりしが、しばらく国の外にはなたれし上は、をぼろけならではかまくらへはかへるべからず。かへらずば又父母のはかを見る身となりがたしとおもひつゝけしかば、いまさらとびたつばかりくやくして、などかかゝる身とならざりし時、日にも月にも海をもわたり、山をもこえて父母のはかをもみ、師匠のありやうをもとひ、をとづれざりけんとなげかしくて、彼の蘇武が胡国に入りて十九年、かりの南へとびけるをうらやみ、仲丸が日本国の朝使としてもろこしにわたりてありしが、かへされずしてとしを経しかば、月の東に出でたるをみて、我が国みかさの山にも此の月は出でさせ給ひて、故里の人も只今月に向かひてながむらんと、心をすましてけり。此もかくをもひやりし時、我が国より或人のびんにつけて衣をたびたりし時、彼の蘇武がかりのあし、此は現に衣あり。にるべくもなく心なくさみて候ひしに、日蓮はさせる失あるべしとはをもはねども、此の国のならひ、念仏者と禅宗と律宗と真言宗にすかされぬるゆへに、法華経をば上にはたうとむよしをふるまひ、心には入らざるゆへに、日蓮が法華経のいみじきよし申せば、威音王仏の末の末法に、不軽菩薩をにくみしごとく、上一人より下万人にいたるまで、名をもきかじ、まして形をみる事はをもひよらず。さればたとひ失なくとも、かくなさるゝ上はゆるしがたし。ましていわうや日本国の人父母よりもをもく、日月よりもたかくたのみたまへる念仏を無間の業と申し、禅宗は天魔の所為、真言は亡国の邪法、念仏者・禅宗・律僧等が寺をばやきはらひ、念仏者どもが頸をはねらるべしと申す上、故最明寺・極楽寺の両入道殿を阿鼻地獄に墮ち給ひたりと申すほどの大禍ある身なり。此等程の大事を上下万人に申しつけられぬる上は、設ひそらごとなりとも此の世にはうかびがたし。いかにいわうやこれはみな朝夕に申し、昼夜に談ぜしうへ、平左衛門尉等の数百人の奉行人に申しきかせ、いかにとがに行なはるとも申しやむまじきよし、したゝかにいぬきかせぬ。されば大海のそこのちびきの石はうかぶとも、天よりふる雨は地にをちずとも、日蓮はかまくらへは還るべからず。

但し法華経のまことにおはしまし、日月我をすて給はずば、かへり入りて又父母のはかをもみるへんもありなんと、心づよくをもひて、梵天・帝釈・日月・四天はいかになり給ひぬるやらん。天照大神・正八幡宮は此の国にをはせぬか。仏前の御起請はむなしくて、法華経の行者をばすて給ふか。もし此の事叶はずば、日蓮が身のなにともならん事はをしからず。各々現に教主釈尊と多宝如来と十方の諸仏の御宝前にして誓状を立て給ひしが、今日蓮を守護せずして捨て給ふならば正直捨方便の法華経に大妄語を加

へ給へるか。十方三世の諸仏をたばらかし奉れる御失は提婆達多が大妄語にもこへ、瞿伽利尊者が虚誑罪にもまされり。設ひ大梵天として色界の頂に居し、千眼天といはれて須弥の頂におはすとも、日蓮をすて給ふならば、阿鼻の炎にはたきゞとなり、無間大城をばいづるごおはせじ。此の罪をそろしくおぼせば、そのいはれありといそぎいそぎ国にしるしをいだし給へ、本国へかへし給へと高き山にのぼりて大音聲をはなちてさけびしかば、九月の十二日に御勘気、十一月に謀反のものいできたり、かへる年の二月十一日に、日本国のかためたるべき大将どもよしく打ちころされぬ。天のせめという事あらはなり。此にやをどろかれけん、弟子どもゆるされぬ。

而れどもいまだゆりざりしかば、いよいよ強盛に天に申せしかば、頭の白き鳥とび来たりぬ。彼の燕のたむ太子の馬、鳥のれい、日蔵上人の「山がらすかしらもしろくなり」にけり、我がかへるべき時や来ぬらん」とながめし此なりと申しもあへず。文永十一年二月十四日の御赦免状、同三月八日に佐渡の国につきぬ。同十三日に国を立ちてまうらというつにをりて、十四日はかのつにとゞまり、同じき十五日に越後の寺どまりのつにつくべきが、大風にはなたれ、さいわひにふつかぢをすぎて、かしはぎきにつきて、次の日はこうにつき、十二日をへて三月二十六日に鎌倉へ入り、同じき四月八日に平左衛門尉に見参す。本よりごせし事なれば、日本国のほろびんを助けんがために、三度いさめに御用ひなくば、山林にまじわるべきよし存ぜしゆへに、同五月十二日に鎌倉をいでぬ。

但し本国にいたりて今一度、父母のはかをもみんとをもへども、にしきをきて故郷へはかへれという事は内外のをきてなり。させる面目もなくして本国へいたりなば、不孝の者にてやあらんずらん。これほどのかたかりし事だにもやぶれて、かまくらへかへり入る身なれば、又にしきをきるへんもやあらんずらん。其の時、父母のはかをもみよかしと、ふかくをもうゆへにいまに生国へはいたらねども、さすがこひしくて、吹く風・立つくもまでも、東のかたと申せば、庵をいでて身にふれ、庭に立ちてみるなり。かゝる事なれば、故郷の人は設ひ心よせにおもはぬ物なれども、我が国の人といへばなつかしくてはんべるところに、此の御ふみを給びて、心もあらずしていそぎいそぎひらきてみ候へば、をとゞしの六月の八日に、いや四郎にをくれてとかゝれたり。御ふみもひろげつるまではうれしくて有りつるが、今、此のことばをよみてこそ、なにしにかいそぎひらきけん。うらしまが子のはこなれや、あけてくやしきものかな。

我が国の事は、うくつらくあたりし人のすへまでも、をろかならずをもうに、ことさら此の人は形も常の人にはすぎてみへし上、うちをもひたるけしきかたくなにもなしとみしかども、をりしも法華經のみぎなれば、しらぬ人々あまたありしかば、言もかけずありしに、経はてさせ給ひて皆人も立ちかへる。此の人も立ちかへりしが、使ひを入れて申せしは、安房国のあまつと申すところの者にて候が、をさなくより御心ざしをもひまいらせて候上、母にて候人もをろかならず申し、なれなれしき申し事にて候へども、ひそかに申すべき事の候。さきざきまひりて次第になれまいらせてこそ、申し入るべき

に候へども、ゆみやとる人にみやづかひてひま候はぬ上、事きうになり候ひぬる上は、
をそれをかへりみず申すと、こまごまとときこえしかば、なにとなく生国の人なる上、そ
のあたりの事は、はゞかるべきにあらずとて入れたてまつりて、こまごまとこしかたゆ
くすへかたりて、のちには世間無常なり、いつと申す事をしらず。其の上、武士に身を
まかせたる身なり。又ちかく申しかけられて候事のがれがたし。さるにては後生こそをそ
ろしく候へ、たすけさせ給へときこへしかば、経文をひいて申しきかす。彼のなげき申
せしは、父はさてをき候ひぬ、やもめにて候はわをさしをきて、前に立ち候はん事こそ
不孝にをばへ候へ。もしやの事候ならば、御弟子に申しつたへて給ひ候へと、ねんごろ
にあつらへ候ひしが、そのたびは事ゆへなく候ひけれども、後にむなしくなる事のいで
きたりて候ひけるにや。

人間に生をうけたる人、上下につけてうれへなき人はなけれども、時にあたり、人々
にしたがひて、なげきしなじななり。譬へば病のならひは何れの病も重くなりぬれば、
是にすぎたる病なしとをもうがごとし。主のわかれ、をやのわかれ、夫妻のわかれ、い
づれかおろかなるべき。なれども主は又他の主もありぬべし。夫妻は又かはりぬれば、
心をやすむる事もありなん。をやこのわかれこそ月日のへだつるまゝにいよいよなげき
ふかゝりぬべくみへ候へ。をやこのわかれにも、をやはゆきて子はとゞまるは、同じ無
常なれどもことほりにもや。をひたるはわはとゞまりて、わかき子のさきにたつはなさ
けなき事なれば、神も仏もうらめしや。いかなれば、をやに子をかへさせ給ひてさき
にはたてさせ給はず、とゞめをかせ給ひて、なげかさせ給ふらんと心うし。心なき畜生
すら子のわかれしのびがたし。竹林精舎の金鳥は、かひこのために身をやき、鹿野苑の
鹿は、胎内の子ををしみて王の前にまいれり。いかにいわうや心あらん人にをいてをや。
されば王陵が母は子のためになづきをくだき、神堯皇帝の後は胎内の太子の御ため
に腹をやぶらせ給ひき。此等ををもひつゞけさせ給はんには、火にも入り、頭をもわ
りて、我が子の形をみるべきならば、をしからずとこそおぼすらめと、をもひやられて
なみだもとゞまらず。

又御消息に云はく、人をまころしたりし者なれば、いかやうなるところにか生まれて
候らん、をほせをかほり候はんと云云。夫、針は水にしずむ。雨は空にとゞまらず。蟻子
を殺せる者は地獄に入り、死にかばねを切れる者は悪道をまぬかれず。何に況んや人身
をうけたる者をころせる人をや。但し大石も海にうかぶ、船の力なり。大火もきゆる事、
水の用にあらずや。小罪なれども懺悔せざれば悪道をまぬかれず。大逆なれども懺悔す
れば罪きへぬ。所謂、粟をつみたりし比丘は、五百生が閻牛となる。瓜をつみし者は
三悪道に墮ちにき。羅摩王・拔提王・毘楼真王・那睺沙王・迦帝王・毘舍佉王・月光王
・光明王・日光王・愛王・持多人王等の八万余人の諸王は、皆父を殺して位につく。善
知識にあはざれば罪きへずして阿鼻地獄に入りき。波羅奈城に悪人あり、其の名をば
阿逸多という。母をあひせしゆへに父を殺し妻とせり。父が師の阿羅漢ありて教訓せし
かば阿らかむを殺す。母又、他の夫にとつぎしかば、又母をも殺しつ。具に三逆罪を

つくりしかば、隣里隣の人うとみしかば一身たもちがたくして、祇洵ぎ おんしょう精舎じゃ 行にゆいて出家をもとめしに、諸僧許さゞりしかば、悪心強盛ごうじょうにして多くの僧坊僧 焼をやきぬ。然れども釈尊あに値ひ奉りて出家をゆるし給ひにき。北天竺てんじくに城あり、細石さいしやくとなづく。彼の城に王あり、竜印りゅういんという。父を殺してありしかども、後に此をおそれて彼の国をすて、仏にまいりたりしかば、仏懺悔さんげを許し給ひき。阿闍世王あじゃせは天 性なり三毒熾盛しじょうなり、十悪ひまなし。其の上父をころし、母を害せんとし、提婆達多だいばを師として無量の仏弟子を殺しぬ。悪逆あくそくのつもりに、二月十五日仏の御入滅むけんの日にあたりて無間地獄むけんの先相に、七処あくそくに悪瘡あくそく出生して玉体しづかならず。大火の身をやくがごとく、熱湯あつたぎをくみかくるがごとくなりしに、六大臣いやくまいりて六師外道を召されて、悪瘡を治すべきやう申しき。今の日本国の人々の、禅師・律師・念佛者・真言師等を善知識ぜんしやくとたのみて蒙古国もうこを調伏じょうぶくし、後生をたすからんとをもうがごとし。其上、提婆達多だいばは阿闍世王の本師なり。外道の六万蔵、仏法の八万蔵はつまんざうをそらにして、世間・出世のあきらかなる事、日月と明鏡とに向かふがごとし。今の世の天台宗の碩学せきがくの顯密二道を胸にうかべ、一切経をそらんぜしがごとし。此等の人々諸の大臣並びに、阿闍世王を教訓せしかば、仏に帰依し奉る事なかりし程に、摩竭提国まかたに天変度々かさなり、地天ちちようしきりなる上、大風・大旱たいかんばつ・飢饉・疫癘えきれいひまなき上、他国よりせめられて、すでにかうとみえしに、悪瘡すら身に出でしかば、国土一時にほろびぬとみえし程に、俄かに仏前にまいり、懺悔して罪きえしなり。

これらはさてをき候ひぬ。人のをやは悪人なれども、子善人なればをやの罪ゆるす事あり。又、子悪人なれども、親善人なれば子の罪ゆるさるゝ事あり。されば故弥四郎殿や しろうは設たひ悪人なりとも、うめる母釈迦仏の御宝前おんたからにして昼夜なげきとぶらはゞ、争あでか彼の人うかばざるべき。いかにいわうや、彼の人親は法華経を信じたりしかば、をやをみちびく身とぞなられて候らん。

法華経を信ずる人は、かまへてかまへて法華経のかたきを怖ををそれさせ給へ。念佛者と持齋じさいと真言師と、一切の南無妙法蓮華経と申さざらん者をば、いかに法華経をよむとも法華経のかたきとしろしめすべし。かたきを知しらねばかたきにたばらかされ候ぞ。あはれあはれ見 参げざんに入こつてくわしく申し候はゞや。又、これよりそれへわたり候さん み ぼう三位房・佐渡公等さどこうに、たびごとにこのふみをよませてきこしめすべし。又、この御文みぶんをば明慧房みょうえ ぼうにあづけさせ給ふべし。なにとなく我が智慧ちゐはたらぬ者が、或はをこづき、或は此の文をさいかくとして才 覚 謗そしり候なり。或はよも此の御房は弘法大師にはまさらじ、よも慈覚大師にはこへじなんど、人くらべをし候ぞ。かく申す人をばものしらぬ者とをばすべし。

建治二年けんじ丙子三月 日

日 蓮 花 押

甲州南部波木井郷山中